『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』11（2008）：133－150

四宅ヤエさんの口承文芸テキスト
おへそから出たスズメのしっぽ

訳・註　田村雅史

1. はじめに

ここで紹介する資料は、冨水慶一氏が昭和43（1968）年6月12日～7月7日までの間に採録した資料（以下冨水資料と呼ぶ）の一部である。冨水資料はオープンリールテープで、計14本、約21時間半に及ぶもので、踊り歌から神謡、そして各物語の日本語解説などが収録されている。また氏自らアイヌ語等の聞き起こし作業までは行っていないが、資料をまとめ、ごく僅かな人へ渡すために作成されたと思われる冊子がある。現在オープンリールそのものは冨水氏が保管されている。冨水資料の3分の1ほどは、2007年3月にアイヌ文化振興・研究推進機構から出版助成を受け、筆者をはじめご遺族や、当時千葉大に所属していた数名の学生が作業を分担し、『四宅ヤエの伝承』刊行会と言う名で『冨水慶一採録 四宅ヤエの伝承　歌謡・散文編』（CD付）として刊行した。ここで紹介する資料は、何らかの形で音声付で刊行したいと思っているものの一部ではあるが、アイヌ口承文芸研究にとって貴重かつ興味深い資料であるため、テキストに加え、小論と語注をつけて紹介したいと思う。

2. 四宅ヤエさんの口承文芸のジャンル

筆者自身は四宅ヤエさんに調査を行っていないので、ここで紹介するジャンルに関する情報は、ヤエさんから何年間にも渡って様々な調査を行った藤村久和氏が発表したものをもとに、筆者がまとめたものである。どのようなものを一つの口承文芸のジャンルと見做すかは、議論の余地あるが、ここでは立ち入らないでおきたい。またどのようなものがそこに含まれるかと言った物語の紹介は簡単に触れるのみにする。

まずアイヌ無形文化伝承保存会編（1986年）『語りの中の生活誌』には、藤村氏がユカラという意味について、整理した記載がある。下に図示したのは、筆者の理解に従って、図に置き換えて整理したものである。図に置き換える際には、氏が「演じ方」と呼んでいる、所謂語りの形式にポイントをおいた。なお説明の文章は、「ヤエ媼がいう「ユーカラ」には三つの意味があり、その一つは「物語」「語りもの」に該当する総称名」（p.175）とあるが、下の図では割愛した。

- 折り節や特有の節がある
  - 各個人がもつ特有の節に乗せて語る……サコロペ
  - 折り節がある
    - 折り節多い……オイナ
    - 折り節少ない……ポイサ
- 折り節や特有の節がない……トゥイタク、ウチャシクマ

割愛以外に図示しなかったものにマッユカラというものがある。これについては先に引用した文章に続いて、(ユカラの意味の)「第二には「男性が主人公となって展開する物語」への総称」(p.175)と述べたあとに、「第二点目に対応する「女性が主人公となって展開する物語」の総称名はマッユーカラ、マッチューカラ、マッチユーカラ(いずれも、女性の物語)などといわれる」と述べている。またマッユカラについて、藤村(1996:160-161)は次のように述べている。

> (前略)ヤエ媼によれば、女性が物語の主人公になっている物語すべてをマッチューカラ〈matci ← cukar - maci - mat - yukar=女性(が主人公)の物語〉、またはマッチユーカラ〈matciyukar ← matcukar=←〉といい、その一例がこの物語であると教えてくださった。なお、マッチューカラとは本篇のような折り節のつくもののほかに、折り節を欠いての語り物、話し口調のものと演じ方にかかわりなく、女性が主人公となる物語を指すそうである。(後略)

つまり、藤村氏の記述から「物語の主人公が男性であるのか女性であるのか」という基準は、語りの形式に関係なく、多くの物語について適用できるものであることが理解できる。

次にトゥイタクについては、アイヌ無形文化伝承保存会編(1983)『アイヌの民話1』の中で藤村氏は、「淡々と語っていく物語群」(p.19)で「その内容は多彩であり、本来節つきの神々の物語や英雄の物語を節をつけずに、ただ語っていくと、ヤエ媼のいうトゥイタクになる。」(p.19)と述べている。さらに『アイヌの民話1』に収録されている「月の神に召されたなまけものの話」は故事来歴談でウチャシクマ、アイヌ無形文化伝承保存会編(1983)『人々の物語』に収録されている1話目の「病気の妹神の自叙伝」は「故事来歴談であると共に、かつては節つきの神々の物語」でオイナ、そして『人々の物語』に収録した2話目「シャチ神の妹の自叙伝」は「女性が主人公になる英雄の物語」でマッユカラと言い分けることができるが、いずれもトゥイタクであることから、「こうしてみるとヤエ媼がいうトゥイタクとは淡々とした語り方の形式である、その内容はそれぞれに原義をふまえて弁別しているわけである」(p.16)と述べている。

さてトゥイタクには上で紹介したような事情もあるので、サコロペとオイナについてだけ、どのような内容であるか簡単に紹介しておく。

サコロペ:オタストゥンクルなどの主人公が悪者を対決する話など英雄の物語

オイナ:フクロウが主人公となり飢饉の村を助けたりするなど自然神が活躍する物語や、ある自然神がなぜ今そのようになっているのかという由来話

これまでポイサについて触れてこなかったが、それについては次節で詳しく見ていく。というのも、本稿で紹介するテキストもポイサではないかと思われるからである。本テキストは冨水資料の中に収められているが、冨水氏が自らまとめた冊子の中にあるテープ目録には、「相戸氏からの借用テープ採録」「ポイ　シヤー(小さい物語)」とあるだけで、その他の記載はない。また、資料中の日本語

解説部分の録音も日本語訳のみで、「ポイ　シヤー」とは何かというやり取りの録音ははい。氏はアイヌ語を聞き起こすことは出来なかったので、日本語解説をヤエさんから聞かせてもらう際にこれはどういう物語ですかというやりとりがあり、恐らくその中で「ポイ　シヤー」という語句が出てきたのであろうと推測される[1]。という状況であるので、氏をお尋ねしてお聞きしたいところではあるが、様々な事情があり、未だ直接お話をお聞きすることが出来かねている状況である。しかしながら次節で紹介する藤村氏の記述から判断して、ポイサと呼ばれる形式を含んだ語りである可能性はあると考えている。そのように考える理由については、四節で藤村氏の記述を比較対照しながら述べたいと思う。

3. ポイサとは

ポイサ（本稿ではポイサに統一する）についての記述は、藤村氏のものに限られるようである。しかしながら、例は少ないながらも、藤村氏の記述も段階を経て、凡そどのようなものがそのように呼ばれるのか詳しい情報が加えられている。

まずポイサについて藤村氏がはじめに記したのは、冒頭でヤエ氏のジャンルを分かりやすく図示するのに使用したアイヌ無形文化伝承保存会編（1986）『語りの中の生活誌』である。しかしそこでは、ごく簡単に「ポイサ（神々の物語のうち折り節の数が少ないもの）」（p.176）とあるのみで、どのようなものかわからない。上記の文献は簡単な記載であったが、藤村（1987）にはより詳しい記載と「ポイサ」のテキストが公開されている。まずはじめに藤村（1987）がポイサとして公開しているテキストがどのようなものか簡単に紹介しておく。

テキスト1

折節：サラネプネー、サラネープ。サラネプネー、サラネプ

主人公：キタキツネ

内容：もともと白だったキタキツネとカワウソの毛色が、キタキツネは赤くなり、カワウソは黒くなったことの由来話。

テキスト2

折節：ホーリムリム。ホーリムリム

主人公：年老いたウサギ

内容：年老いたウサギが目が悪いために、ものが変に見えるようになったことがわかったので、近場で食料を調達し暮らすようになったという物語。

テキスト3

[1] 冨水資料中にはそのやりとりは録音されておらず、事の確かは氏にお伺いするほかない。

折節：ラ、チンラ、チンラ、チン。ラ、チンラ、チンラ、チン
主人公：ねむりの神
内容：ねむりの神にとりつかれた二人のうち、一人はとりつかれたまま眠ってしまったために何もできない落ちぶれた女となり、もう一人は打ち払ったので立派な女になったという物語。

と、以上のような概略を見ただけだとオイナと変わりはない。しかし藤村氏は、ヤエさんからオイナとの違いという観点から受けたポイサのポイントに注目して、同論文の前に発表した6篇のオイナと比べると、句数も少なく、上演時間も総体的に短い傾向があると言えると述べて、下にまとめたようなポイントを上げている。
【ポイサのポイント】（藤村1987：15）
①内容はオイナに比べ割と簡単で，荒筋も複雑でない。
②上演時間は①の影響もあって比較的短く，時には荒筋をさっと流したり，抜き読み的に語る。
③折り節は必ずしも各句間に挿入しなくてもよく，数句間を隔てた後に，あるいは数ヶ所に散りばめる程度に折り節を入れてもかまわない。
④たとえオイナであっても②や③を応用して演ずればポンサやホイサになる。
⑤ポンサやポイサをポンヤイラプ〈pon-yayrap＝小さな―くどき話・打ち明け話〉ともいう（1972（昭和47）年2月3日談）。

次に藤村氏がポイサに言及するのは、藤村（1995）の註1である。なお藤村（1995）で公開されているテキストは、先に紹介したテキスト1と同じ内容である。少し長くなるが、そのまま引用する。（藤村1995：167-168）

〔註1〕（前略）ポイサの概念は意外に広く、今のところ、①内容がオイナであっても、ていねいに各句間に折り節を挿入せずに、語りの文句を中心に、所々にお印（しるし）程度に折り節を挿入するという、折り節の省略形のオイナをポイサという。

②昔話のように話し口調で物語を進めていっても、その途中で森羅万象の神々や人間、器物などがかもしだす物音を、おもしろおかしく旋律をつけたり、似せた音、時にはその音を意味の通じる文句に変えて表現することがある。ヤエ媼によれば、これもポイサであるという。

③気分が爽快なときに思わず口ずさむリズムや鼻唄も、決まった旋律のくり返しよりも、気軽に自由奔放に変容させていく。すなわち、短めで類似していても、音符などで表現すれば、異なる旋律のつぎはぎの状態となる。一度用いた短い旋律が、間を置いて再生する形式のものもポイサという。

どうやらポイサとは、少量または小片の折り節を有する一群の総称であり、語る、話す、

唄うなどという明快に分類できるものとは、また異なる分類の視点ということができよう。それゆえに、考えやすい、ポイサの原義のポン〈pon＝小さい〉を折り節の短さに由来するとした発想は誤りであり、折り節の長短にポイサはまったく関係がないことがわかる。

さて、本篇を始める前に「ポイサ（を一つ）」といって語ったものの、オイナとまったく変わらずに主要な内容の各句間に折り節を挿入したこの物語は、ポイサなのか、オイナなのかを尋ねたところ、「ここまで（ていねいに折り節を挿入して）ゆったら、やっぱりオイナだべな。ほんとうのポイサだったら、（折り節を）粗々ゆえばいいんだ」と説明してくださった。（後略）

以上の引用部分のうち、①の部分は、先に紹介した藤村（1987）の【ポイサのポイント】の①～④を集約したものと言えようが、②と③は新たな指摘である。②は記述内容からして、知里真志保篇訳（1937）『アイヌ民譚集』の「一、ペナンペ放屁譚」の中でペナンペの口の中に入った小鳥のせいで、ペナンペが放屁すると「カニ　ツンツン　ピィ　ツンツン　／　カニ　チャララ　ピィ　チャララ」と音がする、まさにその音をさしていると思われる。しかし、率直に言って、③はどのようなものなのか筆者には想像が及ばないが、口ずさむリズムや鼻歌のことを示しているのであろう。そして「少量または小片の折り節を有する一群の総称であり」という点は分かりやすく、評価できる。「語る、話す、唄うなどという明快に分類できるものとは、また異なる分類の視点ということができよう」とまとめている点については、今後学術的に議論を重ねる課題が残されていると言えよう。藤村（1995）を簡略的にまとめると次のようになる。

A. オイナの簡略的な語り方（抜き読み的に語ったり、折り節を各行に入れないで語る）
B. 話し口調の物語に出てくる様々な物音を旋律化した文句や似せた文句のこと
C. 口ずさむリズムや鼻歌のこと

4. 本稿で紹介する物語

本稿で紹介するテキストの口演時間は14分44秒である。約15分というのは、冨水資料にあるオイナと比べて平均値的なものである。しかし内容は、広く認識されているオイナではなく、所謂パナンペ・ペナンペ譚である。なおこの語りの前にはパナンペ・ペナンペ譚である「トドのシラミ取り」の話が収録されている。語り方は、オイナと同じように繰り返し何度も出てくる節「hakketek teske teske（ホタテガイ、滑れ、滑れ）」がある。これは、繰り返し部分としてではなく、ホタテガイの様子を描写した部分などで本文中にも出てくる。さらに「konkani kokinkin / sikokani kokinkin / kokisakisa kokiriri」と表現されたスズメの音が、決まった場所で何度か出てくる。そして語りの最後には「hakketek ren ren hakketek ren ren（ホタテガイ、沈め、沈め）」という節が登場する。あらすじは以下のようなものである。

【あらすじ】

私（川下の弟）は海岸の丘へ出て行くと、木の上で「コンカニ　コキンキン、シロカニ　コキンキン、コキサキサ　コキリリ」とスズメが飛び回っていていた。私はスズメを捕まえて、首を捻って飲み込むと、しっぽがへそから出てきて、引っ張ると、「コンカニ　コキンキン、シロカニ　コキンキン、コキサキサ　コキリリ」と鳴った。

それから浜へ出て行くとホタテガイがいて、「ホタテガイよ、開け」と言うと、開いたので、その中に入り、海を渡った。マトマイの港に入り、「ホタテガイ、開け」と言うと、開いたのでそこから出て、和人の子供たちが大勢いるところへ行った。

そしてへそから出ているスズメのしっぽを引っ張ると「コンカニ　コキンキン、シロカニ　コキンキン、コキサキサ　コキリリ」と鳴ったので、「アイヌのお爺さん、おもしろい」といって、いろいろなものをくれた。「もう一度」といわれたので、やると、またいろいろなものをくれた。それを持ってホタテガイへ乗り込み、海をホタテガイは滑り滑りしながら渡り、やがて村についた。

村について、私は儲けたので、幸せに暮らしていると、川上の兄がやってきて「どうやって儲けたのだ」と聞いてきたので、「さあ、入って。お話しますよ」というと、川上の兄は「お前だけが知ってるものか」といって、家の入り口の土間のところへ小便をして出て行ってしまった。

私（川上の兄）は「川下の弟だけが何でもわかっていたからって」と思いながら、海岸の丘へいくと、スズメが「コンカニ　コキンキン、シロカニ　コキンキン、コキサキサ　コキリリ」といって飛び回っていたので、捕まえて、首を絞めて飲み込むと、へそからスズメのしっぽが出たので、しっぽをひっぱった。けれども何も音がしないで、ただ鳥の糞が出てくるだけであった。

それから浜へ行くと大きなホタテガイが上がっていたので、（中断）というとホタテガイが開き、それに乗ってマトマイの村へ行った。

やがてマトマイの港に着き、和人の子供たちが大勢いるところへ行った。そしてへそから出ているしっぽを引っ張ったが、スズメの糞が出てきたので、和人の子供たちは「前にきたアイヌのお爺さんはおもしろかったのに、お前は汚い奴だ。くさい奴だ」といって叫んだので、私は走ってホタテガイのところへ行き、それに乗って自分の村へ向かった。

そして自分の村とマトマイ村の間ぐらいの沖合いまで来ると、食べ物がなくて、お腹が空き、力もなくなってきて、「ホタテガイ、沈め、沈め。ホタテガイ、沈め、沈め。ホタテガイ、沈め、沈め」というと、ホタテガイは沈み…（録音終了）

〈日本語解説からの補足〉

それからすっかり沈んでしまい、そのままひどい死に方をした。

本テキストに出てくる「konkani kokinkin / sikokani kokinkin / kokisakisa kokiriri」は、冨水資料の中

に「子供の遊び歌（スズメを押さえて遊んでいる）」[2]というタイトルで収録さている、以下のようなもの中にも出てくる。（冒頭で紹介した『冨水慶一採録 四宅ヤエの伝承　歌謡・散文編』に収録。歌謡編3の62）

sapo nise ki
yupo tapkar ki
konkani kokinkin
sirokani kokinkin
kokisakisa kokiriri

「konkani～」のリズムは、本テキストのものと同じである。この遊び歌がどのような状況を表現しているのかはわからない。しかし、本テキストの登場仕方から推測して、「konkani～」はスズメが飛び回っている様か鳴き声と思って差し支えないであろう。というわけで、本テキストに出てくる「konkani～」の部分は、「B. 話し口調の物語に出てくる様々な物音を旋律化した文句や似せた文句のこと」（藤村1995の②）で、四宅さんがポイサと呼ぶものの一つと考えて問題はないであろう。

また本テキストの折節「hakketek teske teske」であるが、「ホタテガイ、滑れ、滑れ」と原義がはっきりとしている。けれどもホタテガイが主人公となり、この折節で語れるオイナは、公刊されている四宅さんのオイナの中には見られない。なお『冨水慶一採録 四宅ヤエの伝承　歌謡・散文編』にはホタテガイが登場する物語がある。それは散文体の物語で、トミサンペッの娘が主人公で、一人暮らしのその娘の身の上をかわいそうに思ったレプンカムイ（沖の神）は、息子の嫁にしたならば、その娘が救われると思い、その娘に危機が迫ると、息子をホッキ貝やホタテガイにして助けに行かせる。しかし、その娘からひどい目にあわされて戻ってくる。ある時その娘を自分の家に呼び寄せ、ことの次第を告げ、息子の看病をさせ、結婚させる。というのが物語のあらすじである。本テキストと内容的に重複する部分はないが、二節で紹介した藤村のトゥイタㇰの記述から考えて、オイナまたはマッユカㇲが散文体のトゥイタㇰで語られたものであるかもしれない。

さて、本テキストはどのような語り形式または語り物に分類されるものであろうか。まずはじめに冒頭で紹介した四宅さんの語りのジャンル（の形式と内容）と簡単に照らし合わせてみるならば、完全に符合するものはない。では藤村の「ポイサ」の記述はどうであろうか。藤村の上げたテキストは語り方としてポイサの例であると考えられる。しかし、本テキストは内容面を見ても散文形式で語られるパナンペ・ペナンペ譚であることはすぐにわかり、藤村（1995）の記述の①、オイナの簡略的な語り方の「ポイサ」という可能性は極めて低いと考えてよい。次に、藤村（1987）の⑤「ポンサやポイサをポンヤイラプ〈pon-yayrap＝小さな―くどき話・打ち明け話〉ともいうこと」とある点については、ポンヤイラプのテキストに筆者は出会ったことがないので、全く判断できない。もしポンヤイ

[2] 知里（1960）の中に遊戯歌として「カケス遊びの歌」（屈斜路）が紹介される。それにはほぼ同じ文句が使われているが「konkani～」の部分はない。

ラプが、話し口調で語られるのか、節を付けて語られるのかに関わらず、パナンペ・ペナンペ譚のような簡単な内容の話を総じて指しているならば、本テキストは「ポイサ」となるであろう。最後に、藤村（1995）の②、物音を似せた文句は含まれているが、本テキストは節を持って語られる。つまり話し口調ではない。

以上をまとめると、冨水氏の「ポイ　シヤー（小さい物語）」という記載を裏付ける記述は藤村の中に見られないが、「ポイサ」（藤村1995の②）と呼ばれる文句は含まれることは確かである。しかし本テキストのような「ポイサ」と呼ばれる文句を含む物語は、本テキストのみしか確認できていない。トゥイタゥには本来節付きの神々の物語（オイナ）や英雄の物語（マッユカラ）を節なしで、ただ語ったものも含まれていたが（藤村1983）、その逆に本テキストのように本来散文体で語る物語が折り節とリズムを持って語られた場合、何と呼ぶのか藤村には記述がなく、不明である。四宅さんの語った物語で、それと考えられるテキストは本テキスト以外は確認できていない。また本テキストが、ポンヤイラプとも呼ばれる「ポイサ」（藤村1987の⑤）であるのかは不明である。従って、藤村の記述から本テキストをどのように呼ぶかは判断できない。ということになる。

結局のところ、本テキストの「konkani～」の部分が「ポイサ」と考えられるのみで、冨水氏が記載しているように、本テキスト自体を指してジャンル的な呼び方として「ポイサ」と言うかは判断できない。しかしながら、「ポイサ」と呼ばれる可能性がまったくないとは言い難いであろう。そして学術的に考察するにも、語りを聴くにしても、大変おもしろい物語であることは言うまでもない。

5. テキストの表記

テキスト中の＝（イコール）は、その前後にあるものが人称接辞であることを示す。_（アンダーバー）を付したものは、その前後の音素が交替して、別の音素になっていることを表わす。or_ ta→ot ta、an _wa→an ma。awasなどの語頭のhの脱落についても同じように、アンダーバーを使って、_hawasと示した。...で言いよどみを示したが、単語をはっきり言ってしまい、明らかな言い誤りは[　]で括った。聞き起こしに疑問が残るものについては単語末に？を附した。ヤエさんは節を付けて語るときに、例えばpaye=yan ki koのように、母音で終わる語の後に人称のanが来る場合に、yを入れて語るが、このyは表記しなかった。

参考文献

アイヌ無形文化伝承保存会編　（1983）『人々の物語』アイヌ無形文化伝承保存会.

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　（1983）『アイヌの民話1』アイヌ無形文化伝承保存会.

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　（1986）『語りの中の生活誌』アイヌ無形文化伝承保存会.

知里真志保篇訳（1937）『アイヌ民譚集』郷土研究社（『知里真志保著作集　第1巻』1973年平凡社

を使用）.
知里真志保（1960）『アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する調査研究』「文化財委託研究報告」Ⅱ. 文部省文化財保護委員会（『知里真志保著作集　第2巻』1973年平凡社を使用）.
藤村久和　（1987）「神々の物語（7）（8）（9）」『北海学園大学学園論集』58号：13-60.
_____（1995）「四宅ヤエ媼伝承　アイヌの神々の物語【第6話】　食物を分け惜しんだことから毛色が赤くなってしまったキタキツネの神の物語」『創造の世界』第93号：164-173. 小学館.
_____（1996）「四宅ヤエ媼伝承　アイヌの神々の物語【第9話】　兄と夫を風の女神からとりもどしたある女性の話」『創造の世界』第97号：155-165. 小学館.
中川裕（1997）『アイヌの物語世界』平凡社.

本文

hakketek teske teske		
hakketek teske teske		
hakketek teske teske	hunki ka ta	海岸の丘に
hakketek teske teske	sap=as akusu	私は出て行き
hakketek teske teske	inkar=as akusu	見てみると
hakketek teske teske	ni ka peka	木上で
hakketek teske teske	poncikap	スズメが
hakketek teske teske	terkeomanan	跳び回っていた
hakketek teske teske	“ konkani kokinkin	
	sikokani kokinkin	
	kokisakisa kokiriri ”	
	hawki kane	と言いながら
hakketek teske teske	terkeomanan	跳び回っていた
hakketek teske teske	an=nospa ki wa	私は後を追って
hakketek teske teske	an=okanpa ike	捕まえ
hakketek teske teske	rekuci an=noye	（スズメの）首をひねって
hakketek teske teske	an=ruki akusu	飲み込むと
hakketek teske teske	saraha	（スズメの）しっぽが
hakketek teske teske	an=hankapuye kari	私のへその穴から
hakketek teske teske	etuk ike	突き出た
hakketek teske teske	an=etaye ki ko	それを引っ張ると
hakketek teske teske	“ konkani kokinkin	
	sikokani kokinkin	
	kokisakisa kokiriri ”	
	ani hawki ike	と言った
hakketek teske teske	pis ta sap=as	浜へ出て行くと
hakketek teske teske	sine hakketek	一匹のホタテガイが
hakketek teske teske	u an ta ki ṅa	いた
hakketek teske teske	“ hakketek makke ” ani	「ホタテガイよ、開け」と

	hawas[1] akusu	言うと
hakketek teske teske	hakketek	ホタテガイの
hakketek teske teske	caro maka ike	口が開いたので
hakketek teske teske	or_ ta aup=an _wa	その中へ私は入った
hakketek teske teske	“ hakketek teske teske	「ホタテガイ、滑れ、滑れ。
	matomay kotan	マトマイの村へ
hakketek teske teske	paye=an kusu ”	行くからな」
hakketek teske teske	hawas ki ko	と言うと
hakketek teske teske	[repun] atuy ka ta	海の上を
hakketek teske teske	hakketek teske teske kane	ホタテガイは滑り滑りしながら
hakketek teske teske	repup=an _wa	沖に出て行った
hakketek teske teske	matomay kotan	マトマイの村へ向かって
hakketek teske teske	repup=an _wa	沖へ出て行き
hakketek teske teske	matomay kotan	マトマイの村の
hakketek teske teske	tomari oske	港の中に
hakketek teske teske	aosiwa... aup=as wa	入った
hakketek teske teske	u yap=an ike	陸へ上がり
hakketek teske teske	“ hakketek makke ” ani	「ホタテガイ、開け」と
	hawas akusu	言うと
hakketek teske teske	hakketek makke ike	ホタテガイが開いたので
hakketek teske teske	ke... etuppa=an _wa	中から飛び出した
hakketek teske teske	tono kotan	和人の村へ
hakketek teske teske	paye=as wa	私は行き
hakketek teske teske	pon tono utar	和人の子供たちが
hakketek teske teske	okay i ta	大勢いるところへ
hakketek teske teske	paye=an _wa	私は行った
hakketek teske teske	an=hankapuye oro wa	そしてへそから
hakketek teske teske	etuk poncikap sara	出ているスズメのしっぽを
hakketek teske teske	an=etaye ki ko	引っ張ると

[1] ここでは ani と引用句を受けるものがあるが、省略されることが多い。またこの箇所にも当てはまるが、四人称接辞で表わされている人物（つまり主人公）の台詞の場合には、他に名詞をとらない完全自動詞の hawas「言う」を使用し、その他の人物の台詞の場合には、名詞を一つ取る自動詞の hawki「～が言う」を使う、という傾向が四宅さんにはあるようである。

hakketek teske teske	“ konkani kokinkin	
	sikokani kokinkin	
	kokisakisa kokiriri ”	
	ani hawki ki ko	と言ったので
hakketek teske teske	pon tono utar	和人の子供たちは
hakketek teske teske	“ u aynu ekasi	「アイヌのお爺さん
hakketek teske teske	iramasure[2] ”	おもしろい」
hakketek teske teske	u hawkici kane	と言いながら
hakketek teske teske	u... arusa nanpe	いろいろなものを
hakketek teske teske	i=kore ki wa	私にくれた
hakketek teske teske	“ kanna ki wa i=kore ”	「もう一度やってくれよ」
hakketek teske teske	u hawki ki ko	と言われると
hakketek teske teske	anhaea... poncikap sara	スズメのしっぽを
hakketek teske teske	an=etaye ki ko	引っ張り
hakketek teske teske	“ konkani kokinkin	
	sikokani kokinkin	
	kokisakisa kokiriri ”	
	ani hawki ki ko	と言ったので
hakketek teske teske	pon tono utar	和人の子供たちは
hakketek teske teske	“ iramasure	「おもしろい
hakketek teske teske	aynu ekasi ”	アイヌのお爺さん」
hakketek teske teske	u hawkici kane	と言いながら
hakketek teske teske	arusa nanpe	いろいろなものを
hakketek teske teske	i=kore ki na	私にくれた
hakketek teske teske	an=kor wa sap=as	それを持って浜へ出て行き
hakketek teske teske	hakketek oske ne	ホタテガイの中へ
hakketek teske teske	an=omare ki wa	（もらったものを）入れて
hakketek teske teske	anokay nakkay	私も
hakketek teske teske	aup=as ki wa	（ホタテガイの中へ）入り
hakketek teske teske	“ hakketek cupke ”	「ホタテガイ、閉じろ」
	ani hawas ki ko	と言うと

[2] リズムの調整が上手く行かず、すぐにサケへを入れなくてはならなくなったため、語末の-re は省略されている。

hakketek teske teske	“ yaunkur kotan	「ヤウンクルの村（自分の村）へ
hakketek teske teske	u yap=an ki na ”	上がるぞ」
hakketek teske teske	hawas ki ko	と言うと
hakketek teske teske	atuyso kurka	海原の上を
hakketek teske teske	hakketek teske teske kane	ホタテガイは滑り滑りしながら
hakketek teske teske	u yap=an ki wa	進んで行った
hakketek teske teske	an=epirka wa	私はそれで儲けて
hakketek teske teske	okay=an ayke	幸せに暮らしている。すると
hakketek teske teske	penan an=yupi	川上の兄が
hakketek teske teske	u san ki wa	下りてきて
hakketek teske teske	“ nekon e=ki wa	「どのようにして
hakketek teske teske	e=epirka ya ”	お前は儲けたのだ」
hakketek teske teske	u hawki ki na	と言った
hakketek teske teske	“ etak aun	「さあ、入って
hakketek teske teske	ene an? sirki ki wa	どのような次第で
hakketek teske teske	an=epirka ya	私が儲けたのか
hakketek teske teske	e=koyayrap=an na ”	お話ししますよ」
hakketek teske teske	ani? hawas ki ko	と私が言うと
hakketek teske teske	“ eani patek	「お前だけが
hakketek teske teske	e=eramuan pe ”	知っていることか」
hakketek teske teske	u hawki kane	と言って
hakketek teske teske	apaca ta	戸口で
hakketek teske teske	asanto apa	土間の出口で
hakketek teske teske	okoyma ki wa	小便をして
hakketek teske teske	oman ki na	出て行った
hakketek teske teske	ankam... an=yupi	兄は
hakketek teske teske	aynu komote?[3]	?
hakketek teske teske	kataenawki?	?
hakketek teske teske	okay=an akusu[4]	暮らしていると
hakketek teske teske	penan an=yupi	川上の兄

[3] ここから数行は録音状況がひどい。
[4] aku と言っているが、これは節をつけて語る際に使うことがある akusu の省略した形である。

hakketek teske teske	panan an=aki?	川下の弟？
hakketek teske teske	ene iki wa	あのようにして
hakketek teske teske		
(OWARI)[5]		
hakketek teske teske	penan yupi	川上の兄
hakketek teske teske	panan an=aki	川下の私の弟
hakketek teske teske	patek nep kay	だけが何でも
	eramuan kusu	わかっていたからって
hakketek teske teske	yaynu=as wakusu	と思ったので
hakketek teske teske	hunki ka ta	海岸の丘に
hakketek teske teske	sap=an ki ko	下りていくと
hakketek teske teske	hunki kasi ta	海岸の丘の
hakketek teske teske	ni ka peka	木の上で
hakketek teske teske	poncikap	スズメが
hakketek teske teske	terkeomanan	跳び回っていた
hakketek teske teske	konka...	
	“ konkani kokinkin	
	sikokani kokinkin	
	kokisakisa kokiriri ”	
	ani hawki kane	と言いながら
hakketek teske teske	terkeomanan	跳び回っていた
hakketek teske	a... an=nospa ki wa	私は後を追って
hakketek teske teske	an=okanpa ike	捕まえて
hakketek teske teske	rekuci an=nunpa	首をしめて
hakketek teske teske	an=ruki akusu	飲み込むと
hakketek teske teske	an=hankapuye wa	私のへそから
hakketek teske teske	sara etuk	しっぽが出てきた
hakketek teske teske	an=etaye ki ko	それを引っ張ると
hakketek teske teske	omo hawe as	何も鳴らないで
hakketek teske teske	ne cikap siye	その鳥の糞が
hakketek teske teske	etuk ki na	出てきた

[5] テープ切れによる中断。

hakketek teske teske	pis ta sap=as	浜に出て行くと
hakketek teske teske	onne hakketek	大きなホタテガイが
hakketek teske teske	yan awan ike	上がっていて
hakketek teske teske[6]		
hakketek teske teske	nep[7] _hawas ki ko	と言うと
hakketek teske teske	hakketek makke akusu	ホタテガイが開き
hakketek teske teske	oske aup=an _wa	その中へ私は入り
hakketek teske teske	hawas kane[8]	（「ホタテガイ、滑れ滑れ」）と言いながら
hakketek teske teske	“ matomay kotan	「マトマイ村へ向かって
hakketek teske teske	repup=an na	沖を進むぞ
hakketek teske teske	repuyso kurka	沖の海原へと
hakketek teske teske	repup=an _na ”	進むぞ」
hakketek teske teske	nep _hawas kane	言いながら
hakketek teske teske	repup=an ayne	そうしてとうとう
hakketek teske teske	matomay kotan	マトマイ村の
hakketek teske teske	matomay ru? oske	（港の？）中へ
hakketek teske teske	aup=an _wa	入り
hakketek teske teske	yap=an ki na	陸へ上がった
hakketek teske teske	“ hakketek makke ”	「ホタテガイ、開け」
hakketek teske	hawas ki ko	と言うと
hakketek teske teske	hakketek makke na	ホタテガイが開いた
hakketek teske teske	etuppa=an _wa	そこから出て
hakketek teske teske	paye=an ko	（道を進んで）いくと
hakketek teske	pon tono utar	和人の子供たちが
hakketek teske teske	okayci orke	たくさんいる所へ
hakketek teske teske	paye=an _wa	行き
hakketek teske teske	an=hankapuye wa	へそから

[6] ここで一時的に録音が中断してる。
[7] nep には「何」という疑問・不定副詞の意味もあるが、ここでは意味はなく、虚辞である。
[8] 日本語解説部分では「matomay kotan さ、また、hakketek teske teske っていって、いっていって」とあり、その部分が省略されている。5 行後にも同じよな省略が見られる。深読みかもしれないが、本テキストの折り節である「hakketek teske teske（ホタテガイ、滑れ、滑れ）」は、マトマイ村へ向かう際にホタテガイに掛けた呪文のようなものである。ここもこれまでと同様の折り節であるが、台詞部分も兼ねている、または台詞そのものという解釈

hakketek teske teske	ne poncikap saraha	そのスズメのしっぽを
hakketek teske teske	an=etaye ko	引っ張ると
hakketek teske teske	poncikap siye	スズメの糞が
hakketek teske teske	etuk ki ko	出てきて
hakketek teske teske	pon tono utar	和人の子供たちは
hakketek teske teske	“ naunno ek	「この前きた
	u... aynu ekasi	アイヌの爺さんは
hakketek teske teske	iramasure	おもしろかった
hakketek teske teske	u ki a korkay	けれども
hakketek teske teske	tane ek aynu anak	今来たアイヌは
hakketek teske teske	icakkere	汚い
hakketek teske teske	hura at kur ” ani	くさい奴だ」と
hakketek teske teske	u hawkici kane	言いながら
hakketek teske teske	i=okewe	私を追い出した
hakketek teske teske	oyupu=an ki tek	走って
hakketek teske teske	hakketek or_ ta	ホタテガイのところへ
	oyupu=an _wa	走って
hakketek teske teske	aup=an _wa	入り
hakketek teske teske	“ yaunkur kotan	「ヤウンクルの村（自分の村）へ
hakketek teske teske	osippa=an _na ”	戻るぞ」
hakketek teske teske	hawas kane	と言いながら
hakketek teske teske	hawas kane	言いながら
hakketek teske teske	tane anakne	今
hakketek teske teske	repunkur atuy	レプンクルの海
hakketek teske teske	yaunkur atuy[9]	ヤウンクルの海
hakketek teske teske	yap=an ki ko	（の間に）やってくると
hakketek teske teske	ipe kay isam	食べ物がなく
hakketek teske teske	nep an ki kusu	そういう状況だったので
hakketek teske teske	ipe rusuy	お腹がすいて
hakketek teske teske	keorosak=an na	力がなくなってきた

も考えられるのではなかろうか。

[9] 日本語解説では「真ん中あたりに来てから」と言っているので、「atuy utur_ ta（海の真ん中）」という語句が省略されている。

hakketek teske teske	hakketek teske teske	ホタテガイ、滑れ、滑れ
	ani hawas	と言うと
hakketek teske teske	keorosak kasu wa	力がなくなりすぎて
hakketek teske teske	u ki wa	そうなったので
hakketek teske teske	“ hakketek renren	ホタテガイ、沈め、沈め
	hakketek renren	ホタテガイ、沈め、沈め
	hakketek renren ”	ホタテガイ、沈め、沈め
	nepaatte?[10]	
hakketek teske teske	hakketek ren wa	ホタテガイは沈み
	hakketek ren ren	ホタテガイ、沈め、沈め
	atuysokur sta	海に
	hakketek ren ren	ホタテガイ、沈め、沈め
	hakketek ren wa	ホタテガイは沈み
atuykurso or_ ta[11]	海に	

（たむら　まさし・千葉大学社会文化科学研究科）

[10] 日本語解説では、「間違って、ゆってしまって」とあるが、聞き取れない。
[11] この箇所は節がつけられていないが、ここで録音が終了している。この後については、4節のあらすじにて補足してある。

Folklore Text of Yae Shitaku
The tail of the sparrow which appeared from a navel

Masahi Tamura

Summary:

This text is a part of the materials which Keiici Tomimizu recorded from June 12, 1968 to July 7. In his book in which he arranged the materials, this text is called as "*Poysa*". The content of this text is the same as the narrative of *Pananpe*, which is usually recited by prose, but it is recited with refrain and rhythm in same way as *Oyna*. And in this text the expressions that Fujimura (1995) calls "*Poysa*" are included. In comparison with the description by Fujimura, however, we cannot judge clearly what kind of genre this text should be called as. Therefore, it may be said that this text is problematic example for the studies of Ainu folklore in East Hokkaido.

Outline of text:

I am the younger brother of the downriver village. One day when I went to the beach, a sparrow ran about it. I caught the sparrow and swallowed it, then sparrow's tail came out of my navel. When I pulled it, an amusing melody sounded from my stomach. I rode on a scallop and went to the village of Matomai. When I went before many Japanese children and pulled the sparrow's tail, the amusing melody sounded from my stomach. They cheered and said "it's funny", and gave me various things. Then I came back to the village and lived happily. One day, the older brother of the upriver village came in my house, then complained and left my house.

I am the older brother of the upriver village. As the younger brother of the downriver village did so, I also went to the beach and did the same thing. However, nothing made a sound even if I pulled the sparrow's tail, but only the feces of the bird came out. And when I went to the village of Matomai, I did the same thing as the younger brother of the downriver village. But because the feces of the sparrow came out, the children said "it's dirty", and chased me away. When I escaped to the offing, I got hungry and also my strength was lost. When I said "the scallop, sink into the sea", the scallop completely sank. Without rising up to the surface of the sea, I approached the cruel death.